

これまでの登山・労山…そしてアルパインクライミングのことなど

くすのき山遊会 織田博志

ごあいさつをかねて自己紹介させていただけます。私は、大阪市で生まれ育ちました。中学校の行事、耐寒登山で生まれて初めての霧氷の金剛山、山歩きを体験しました。この時、雪の山歩き、雪の山に魅せられました。以後、私は雪の山、冬の山をめざして登山をします。クラスメイトに後に松本山岳会で黒部、上ノ黒ビンガを初登攀した川瀬君がいます。彼に山岳雑誌の存在を知らされ、岳人、を読ませてもらいました。

60年代後半から登攀を始め欧州の著名なアルピニスト達に憧れてアルパインクライミングをめざしました。結婚と同時に枚方市へ転居し、40年暮らしています。

職業は27歳で、日本アルパインガイド協会の公認ガイドとなり、アルパインクライミングガイドを60歳まで続けました。年間に200日から250日も入山していました。文科省登山研修所では20年に及ぶ講師を務めさせていただきました。

現在、所属山岳会は地元枚方のくすのき山遊会、です。吉尾弘さんと約束したので労山に戻ってきました。大阪労山に戻り、4年が過ぎました。最近、秋は日本海温帯ブナの生育する山や森の山歩き。冬、春は山頂をめざし、山スキーを楽しんでいます。

くすのき山遊会の仲間であり大阪労山事務局長として活躍されている高橋明代さんから「書いてみいひん?」と酒席で依頼されました。織田は先輩達の教えどおり酒席での約束は守ります。

大阪労山のアルパインクライミングをめ

ざして活動している人達に語っておきたいことがありました。何回になるか?と思いますが連載させていただきます。

私はいつの時代でも主役は青年達だと思っています。豊かな感性と冒険心をもつ若者たちが変革・前進させます。激しく強いエネルギーを内在させています。何故、年代のバトンを渡せなかったのか山岳会の現状も考えながら記述していきたいと思います。現在は、くすのき山遊会の理事として理事会へ。また、クリーンハイキングなどの行事に参加して、労山活動をしています。今後とも、皆さんと活動していきますので宜しくお願いします。

大阪労山に加盟した頃「労山と私」

私が労山で所属していた山岳会は大阪凍稜会です。64年に創立され、困難なタフネスな登攀を実践するために結成された山岳会でした。当時の大阪凍稜会は先輩達が穂高や剣で腕を磨いていました。六甲の岩場でよくお会いしていた先輩達に「高校を卒業したら凍稜会へおいで」と誘われていました。素直にそのとうり入会しました。私の会での初山行は、穂高屏風岩東壁雲稜ルートから前穂高岳東壁Dフェース田山・山本ルート～前穂高岳への継続登攀でした。私はこの山行から常にザイルのトップに取り方を学ぶ方法は、ルートを拓くんだよと先輩達と小太郎岩算盤ルンゼ、紅ヶ岩にルート開拓しました。先輩達は若く意気盛んで兄とも思える人達でした。ザイルを結びあう良き仲間と出会い生まれ、真実によかったと思います。

私と大阪労山の関係は70年代初めからでした。同じようにアルパインクライミングをめざしていた城東登攀クラブの北山さん、三崎さん達との交流。北大阪のぼろう会の池内さん、辻さん、川越さん（後に凍稜会に入り私のパートナーとなる。）との山での出会いなどから発展して、大阪府岳連盟から大阪労山への加盟変更でした。大阪労山は、結成されて浅く保守的な部分が無いので、新鮮に感じました。少数ではありましたが世界の山々へ、先鋭的なアルパインクライミングをめざす熱気もありました。

私が労山で多くの人達と交流できるようになったのは、76年の大阪労山初めての海外登山隊派遣が契機でした。アラスカ・ハンチントン峰西壁登山隊の隊長として参加し、立案から実践までリードしました。多くの仲間の支援を受けました。ライトエクスペディションをテーマに勤労者でも海外でレベルの高い困難なアルパインクライミングを実践したいと思いました。40数年前の5.9 A2 45ピッチの花崗岩の岩壁と氷雪の期待どりの登攀でした。64年にトレイ率いる仏隊が北西稜から初登頂。翌65年ロバーツ率いるハーバード隊が西壁により困難なルートを開拓しました。ハンチントンの頂上は鬼の角のように巨大な雪庇を発達させ雪、氷、岩壁に守られています。私達は初登攀から11年後に西壁の再登をめざしました。初登攀は極地法でしたので、アルパインスタイルで登攀したいと考えました。より良いスタイルで11年の差を縮めたいと思いました。結果は好天を利用して一気に2ビバークで完登、登頂しました。巨大な鬼の角に立った時、恐怖の山、というハンチントン峰の代名詞が実感できました。ロバーツ隊は隊員の死亡者を出していたので無傷で終了したことに私は深く安堵しました。凍稜会、志峰会、

城東登攀クラブから織田、川越、斎藤、岡本、畦元、金村の6人のチームでした。ザイルのパーティー構成は、8mm径100mを2本用意して各3人に1本ずつ使用した。ダブルにしてリードする者は結び、各端に1名ずつ結びあいました。アルパインクライミングでは使用するザイルの長さや径が時として成否を決める時があります。私はリードしている時8mm径の50mダブルはとても軽く感じました。

ロバーツはその後ディッキーマン南壁などアラスカでも大活躍しました。私にとってもこの登攀はアラスカへ通う契機となりました。ライトエクスペディション24万円で35日間は計画どおりいき、帰国後、全員職場復帰しました。

以後、労山では中級登山学校やダイトレ、事務局次長など引き受け活動しました。当時の理事長、金谷さん、事務局長、新保さん達と楽しく労山活動をしました。あの頃の理事をされていた方達と今、再会できることは大きな喜びです。お互いに生き残れたということですから。(つづく)